

# ENCOM YOKOHAMA

## ニュースレター No.3

December 2016

カトリック横浜教区難民移住移動者委員会

〒231-0055 神奈川県横浜市中区末吉町 1-13  
カトリック末吉町教会内  
TEL : 045-315-7040 FAX : 045-315-7080  
E-mail: encomyoko@gmail.com

クリスマスと新年おめでとうございます！

### \*第1回 国際フェスタ～イエスの食卓を囲んで～



世界難民移住移動者の日の 9月 25日、 ENCOM YOKOHAMA(難民移住移動者委員会) 実行委員会主催の「国際フェスタ～主の食卓を囲んで～」が末吉町教会で開催されました。今回のテーマには、ミサで主の食卓を囲み、 フードコートで各国の食卓を囲むという二重の意味合いが含まれています。

参加者約 700 人は言葉の違いを超えて交流し、記念すべき 1 日となりました。ペルー、ブラジル、中国、ベトナム、韓国、フィリピン、日本の 7 つのコミュニティーが一緒になって、このフェスタが意義深いものとなるよう、計画から実施まで皆が共に力を合わせました。国際ミサは各小教区で試行錯誤を重ねながら行われていますが、今回は交わりと一致に焦点を当てることにしました。パッチワークのようなミサにならないように、聖歌は同じメロディで歌われているものを選び、各言語で 1 番ずつ歌うことになりました。またミサ式次第に各言語訳を載せ、日本語にはローマ字でルビをふり、朗読も各民族衣装を着た奉仕者が担当しました。

梅村司教主司式のもと 6人の司祭が共同司式をし、説教の中で司教は「神の国が宴席とたとえられるように、私たちもそれを先取りして一つの祭壇を囲みミサを捧げることができたのは、神の国の実現を見たよう」だと話されました。

派遣の歌の「あめのきさき」はすべての言語で歌い、その声が教会から 100 メートルも離れた所まで聞こえたとのことで、これこそ交わりの典礼、宣教の典礼ではないかと思わされました。

ミサ後に行われたフェスタでは、李ビヨンホン神父の開催の言葉に続いて各

国の歌や踊りが披露され、大人も子供もクイズやゲームを楽しみました。フィリピン・コミュニティーのバンブーダンスには誰彼となく誘われて加わり、梅村司教も断り切れずに参加、会場は大いに盛り上がりいました。催しの傍ら、販売された各国の民族料理にも皆が舌鼓を打ちました。

当日は、信仰のうちに一つとなっていることが強く実感されました。国境のない出会いを通して、兄弟姉妹として互いを受け入れる心の広さと分かち合いの雰囲気に満ちていました。

7つのコミュニティーメンバーからなる実行委員会は、この日のために半年前から準備を始め、会場を整備し、ミサとフェスタを祝い、後始末までのすべてを担う中で、皆が「共にある」ことの喜びに満たされました。

このような交わりが今後さらに教区全体に広がっていきますように！

### **＊難民移住移動者委員会全国研修会**

日本カトリック難民移住移動者委員会全国研修会が 10 月 10 日～12 日、浜松教会で開かれ、北海道から沖縄まで、80 名を超える司祭、修道者、信徒が集まりました。「違いは豊かさ～外国につながる子どもたちの夢・現実・未来～」をテーマに、現状報告と将来の課題について、私たち（参加者、教会）に何ができるかを話し合い、新たな課題と提言を持って、それぞれの場へ再派遣される集いとなりました。

最初の講演は、NPO 法人浜松外国人子ども教育支援協会理事長の田中恵子さんが、公立小学校における母国語支援と、学校外での教育支援について、その実情と問題点を話されました。

浜松で働く外国人約 2 万人のうち、ブラジル人が半数近くを占め、フィリピン、ペルー、ベトナム…と続くその子どもたちには、親との信頼関係を築く上でも、言語形成と人間形成の面からも、母国語支援を進めています。主体性、協調性、言語能力、異文化理解などは、愛情ある人とのかかわりの積み重ねの中で身につくものだからです。安心感の中で自分を見つけ、アイデンティティーと自己肯定感を得ること、親とも日本人の友とも違う悩みに、あなたは、あなたのままでいいと伝えること、民族、文化や習慣の違いは豊かさにつながると気づかせたいと努力しています。



しかし、子どもたちは年齢で学年に振り分けられ学校で疎外されるなどして、学習日本語を身につけるのは難しく、定時制高校へ進んでも退学者も多く、その先の支援も難しくなるのが現状です。

オーバーステイや強制送還など子どもの力では解決できない問題も増えています。世の中の流れに大きく左右されるので、リーマンショックや東日本大震災などで日本を去らざるを得ないという現実があります。子どもたちの夢や将来に向かっての努力なども、方向性が定まらないと不安定になるので、帰国するか否かを決める際の親の覚悟が大事です。親の意識と姿勢によって、子供の成長に良い結果をもたらすことはどの国でも同じようです。



続いての講演は、行政からの依頼で見回りや刑務所訪問を 20 年近くにわたって続けておられるアデライダ阿波根さんから、非行に走る若者の背景と未来について、切実な訴えがありました。

親の長時間労働のために、夫婦関係も親子関係もかかわりが薄くなり、孤独が増し、お金優先の考え方方が子どもにも伝わります。時の流れの中で、自分の輝きを失っていく人々が多く、国と人々の無関心の中で、夢も希望も

目的もない子供たちは、良くないところへ行くようになります。秩序、我慢、自分の限界を悟ること、自分にあったやり方でよくないものとの距離をとるよう教え、内から外へという癒しの道と一緒に歩いています。

傷を負っている人々を助け、癒しをもたらすには、自分にとって良いと思えることを相手の立場に立ってすること。報いを求めない。心折れる時、教会の支えに感謝している。子どもは夢をつかみ始めたら変わる。これから日本の教会の証しは、互いをリスペクト（尊重）しあうこと。人間としての自立（自律）を助けるために、今、私たち自身と教会が問われているということです。

幼い頃、親に連れられて来日した青年たちも、それぞれの置かれた現状や希望について、体験談を分かち合い、アイデンティティーに悩みながらも、差別や偏見を乗り越えて歩んでいる姿が、多くの参加者の心を打ちました。

フィールドワークでは市内のブラジル人学校を訪ねました。企業が顧みない外国人移住労働者の子どもたち、0歳から高校生まで 150 人以上を預かって、日々奮闘しておられる先生方と子どもたちの声を聴きました。

その夜の懇親会では、ブラジル人信徒経営の心づくしのケータリングに、ペルーの歌や踊り、フィリピンのバンブーダンスも加わって、「神の民」の集いを喜び合いました。

研修会の最後に、委員長の松浦司教より、分科会のまとめと提言がありました。

子どもたちは、2つの国の狭間で揺れ動きながら、私というアイデンティティーを統合せざるを得ないという事実をまず心にとめよう。共同体が最終的に目指すのは、一つの教会に向かって「神の民」と

なること。小教区という一つの共同体の中で、「多言語ミサ」（母国語で神を賛美）をすることや、外国籍信徒を委員会等その小教区の決定機関に招くことで、手伝いではなく対等な関係へと互いの意識を変えることが大事である。優先事項をはっきり示し、それぞれの現場で目指していく。たとえば、親たちの素朴な信仰を土台として、信仰の核を伝えられる分かちあいや学びの場を作る。彼らの生きることそのものである祭りにカテケシスを入れていくなどして、親と同じ空間で遊び、学び、世代を超えたつながりを育てていってほしいと結ばれました。

研修会を締めくくる国際ミサでは、それぞれが大事にしている言語で「主の祈り」を唱え、ここでは司祭・修道者・信徒が、小さくされた人々と共に生きる中で、既に一つになっていることを強く感じさせられました。

### \*学習支援



多目的スペースで毎週土曜日に、フィリピンにつながる子供たちの学習支援を始めて2年が経ちました。始めた頃、中学2年生だった子どもが高校に進学し、新しい環境の中でも明るく学校生活に励んでいる様子を見て嬉しく思っています。高校受験を控えた中学生、宿題をするために来る小学生、来日して学校に通うようになってからまだ日の浅い中学生など、毎週10人前後の子どもたちが集まっています。夏休みには縄跳びの宿題がある小学生に、縄跳びの練習を付き合うときもありました。9月の国際フェスタでは、小学生がヒップホップダンスを練習し、披露しました。また、学校の遠足に行けなかつた子どもと鎌倉に一緒に行ったり、勉強以外のアクティビティでも交流を深めています。子どもたちにとって、安心できる居場所として、今後も活動を続けていきたいです。

### \*信仰教育委員会 & ENCOM 共催 秋の研修会

11月3日、藤沢教会において、《みんなひとつ 一 ちがいをこえた神さまの子どもたち》—外国につながる子どもたちの教育—というテーマで研修会が行われました。

はじめの祈りに続いて、カトリック新聞社の大元麻美記者より、外国につながる子どもの現状と課題

について、カトリック信徒のみならず日本人の全てが知らなくてはならないことがわかりやすく説明されました。

午後は、甲府教会、松本教会、焼津教会、貝塚教会、二俣川教会、大元麻美記者の6グループに分かれて分科会を行い、その後、全体で分かちあいました。

日本にいるカトリック信徒のうち、外国籍信徒は50%を占め、一番多い教区は私たちの横浜教区です。日本だけの現象ではありませんが、横浜教区内の外国につながるカトリック信徒の子ども、若者たちが新宗教、新新宗教へと流れている現実もあり、カトリック教会が彼ら、彼女らにとっての居場所、セーフティーネットとなっていけるかどうかが問われています。

外国籍の児童生徒は、日本の義務教育の対象外であるため学校に通わない子どもたちもあり、また、外国人学校は各種学校の扱いであるので、日本の大学に進学できないなど、様々な問題が横たわっています。

研修会の最後は李廷胤神父、濱田壮久神父司式による英語＆日本語のミサで終了しました。

### ＊JFC親子の移住について

ENCOMのフィリピン司牧チームのスタッフ、レニー・トレントイノ（信徒宣教者）が、10月中旬、マニラとダバオで開催されたJFC（日本人とフィリピン人を親に持つ子供たち）とその母親の安全な移住に関するワークショップに参加しました。これは昨年10月に発足したトヨタ財団の補助によるSMJ（移住者と連帯する全国ネットワーク）の活動の一部です。



この企画の目的は、フィリピン人の安全な移住にあるだけではなく、彼ら、彼女らの日本での生活が尊重されるということです。更に、フィリピン共同体を力づけ、日本とフィリピンの支援組織の間に、国を超えたネットワークを作ることを目指しています。また、移住者を送り出す国と日本との両国において、移住者の共同体、支援グループ、関係する政府機関に、日本における人身売買と搾取の現実を喚起させるためのアドボカシービデオの作成を計画しています。

マニラとダバオのワークショップは対話を通して作り上げていく形を取り、JFC とその母親、マニラの姉妹組織（マリガヤハウス、バティス＆ドーン）、ダバオの組織（COW 海外労働者のための善き牧者姉妹会センター）との共同企画でした。

ワークショップの第一の目的は、日本における人身売買の新しい形を示し、フィリピン人（JFC とその母親を含む）の人権侵害を防ぐためのビデオを上映することでした。それによって JFC とその母親たちは日本への移住の危険性を理解した上で、移住への強い願望と困難について話すことのできる場になりました。必要なサービス（精神的、社会的なものも含む）に関しては、JFC と政府の代表者との間の意見交換の場にもなりました。それは、JFC とその母親に人権侵害のないリクルートであることに注意し、彼ら、彼女らの日本への移住を安全なものとするよう、政府に働きかけることでした。

100 人以上の JFC と母親が 2 つのワークショップに参加しました。全員が、経済的理由から日本に移住したいと望んでいます。JFC の最も強い望みは、自らのアイデンティティーを求めるのことでした。

フィリピンの JFC とその母親は、慈善団体を装うプローカーの標的となっています。彼らは、日本での仕事や子供の学校に関する書類を準備すると約束しますが、後になって初めて、移住者は自分が借金を背負わされていること、搾取されたことを知ります。

現実問題として、フィリピンから日本への移住を誰も止めることは出来ません。ENCOM のフィリピン司牧チームは、他の NGO と協力しながら、日本でのフィリピン人の多方面からの支援に当たり、安全で尊厳ある生活を守るために活動しています。

### \*ご協力のお願い

病気や怪我などで働けなくなり困窮している外国人とその家族や、入管に収容されている外国人支援のため次のような物が不足しています。ご寄付をお願い致します。

食料品：お米、レトルト食品、カップラーメン、インスタントコーヒー（袋入り）、砂糖等  
(賞味期限・消費期限に余裕のあるもの)

日用品：石鹼、洗濯用洗剤、歯磨きチューブ、タオル、男性用靴下（いずれも新品、未使用のもの）

文房具：便箋、封筒、ボールペン

その他：英語・スペイン語・ポルトガル語聖書、ロザリオ

☆宅急便の場合は火～金曜日の間に届くようにお願い致します。

### \*ご寄付のお願い

ENCOM YOKOHAMA の活動は一般寄付金とカトリック横浜司教区からの助成金によって支えられています。ご支援をよろしくお願い致します。

郵便振替 00270-7-98145

加入者名 ENCOM YOKOHAMA

他の寄付については下記までお問い合わせください。

ENCOM YOKOHAMA 事務局

Tel. 045-315-7040 (火～金 10:00～16:00)

E-mail: encomyoko@gmail.com